

平成21年度 【 大学振興会研究奨励補助 】 研究成果報告書

学部名 人間関係学部

フリガナ ヤマネ 伊吹
氏名 山根 一郎

研究期間 平成21年度

研究課題名 小笠原流煎茶・聞香の教育

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	山根一郎	人間関係学部	教授
研究分担者			
研究分担者			

1. 本研究開始の背景や目的等 (200字～300字程度で記述)

日本礼法の代表的存在である小笠原流礼法の、そのまた中心的存在である小笠原流宗家礼法には、通常の礼法だけでなく、草庵茶の開祖・村田珠光直系の最も由緒ある茶の湯があり、また聞香や煎茶の作法も含まれている。小笠原流礼法は、茶や香を独立した芸道とみなすのではなく、これらを統合した生活の作法としているのである。その総師範でもある筆者は、礼法授業に後続する段階として、礼法の応用としての茶や香の作法を指導するのが本研究の目的である。抹茶の道具類は平成18年度の申請で購入できたので、今回は煎茶と聞香の道具を揃えたい。

2. 研究方法等 (300字以内で記述)

煎茶の角盆点前の道具(湯瓶、角盆、湯冷し、煎煤、茶托、茶壺、茶巾、着纏)を2セット(茶碗は購入済み)と、聞香の道具(香炉、灰、炭、香匙、銀葉、香箸)を1セット、それに香木として「沈香」と香の最高峰である「伽羅」を購入した。香は実際の香りを体験する必要があり、とりわけ伽羅は1g=1万円と高価であり個人での購入は難しいため、このような予算をいただいて購入することができた。幸い、伽羅は他の安い香木と異なり、焚かなくてもそのまま十分な香りを発するため、焚いて消費することなく、学生に伽羅の香りを体験させることができた。

ただし煎茶の実際の指導は次年度以降に持ち越される(理由は「概要」で述べる)。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

本研究の予算はすべて上述した道具の購入に宛てられた一方、実践には準備期間と受講者の成熟期間を要するため、今年度は香の体験（沈香と伽羅の違い）のみで終わった。

準備期間とは、講習用の教材の作成期間であり、現在、抹茶点前と煎茶点前を統合した教本を作成中である。ただ稽古用テキストには写真やイラストが必要なため、その部分の作成に手間取っている。

受講者の成熟期間とは、礼法から茶の湯に至るカリキュラムの進行期間である。本研究の実践は、正規の授業（日常動作法）外の補講という形で行われており、授業を履修した次の段階でまずは最も簡単な道具ですむ略盆点前を講習する。そこで点前が身についた学生は次に風炉点前・炉点前へと進む（これら点前の道具は平成18年度にいただいた振興会の予算で購入したもの）。現在はこの段階が最終であり、来年度から煎茶と香の講習が追加予定である。

このように礼法の応用としての茶の湯作法の講習は毎年深化しているのだが、それに伴う問題も発生している。略盆点前を含めたそれ以降の講習はすべて正規の授業外であるため、担当者（筆者）の負担が増大する一方である（来年度は更に増える）。しかも学生が2学部にわたることもあって希望者が多く、今年度は略盆点前だけでも3クラスの講習を開催した（講習回数は7,8回）。それでも略盆点前なら一度に10名は可能だが、それ以降の講習は道具の関係で受入れ可能な人数が限られ、釜を使う点前は最大4名、煎茶は2名となる。

このように担当者の稼働と定員が限界に達しつつあるが、予算と場所を快く提供して下さる学園・大学側の協力、そしてこれらの講習に参加する学生の熱心さが励みとなっている。そして何よりも、茶の湯だけあるいは礼法だけの実技を教える大学は複数あるが、両者をともにしかも最も由緒ある小笠原流として統合的に教えているのは本学のみであることの自負が、本研究を続ける意欲を与えている。

4. キーワード (本研究のキーワードを1以上8以内で記載)

①作法	②小笠原流礼法	③茶の湯	④煎茶
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

本研究は小笠原流礼法の教育実践であるので、ただちに学術研究には結実しない。筆者の小笠原流礼法の学術研究は、本研究によるものではないが、今年度の『研究論集』に「伝小笠原政康著『当家弓法大双紙:宮仕門上』(飯塚恵理人教授と共著)、および『椋山人間学研究』に「武家礼法の身体観」を投稿済みであり(ともに印刷中)、これらの研究は今後も継続する。礼法にとっては学術研究以上に実践が必須であるため、本研究こそが小笠原流礼法の研究の基となっている。そのため必要なのは研究書以上に作法の教本である。現在小笠原流の抹茶と煎茶を併せた教本『小笠原流茶礼』を執筆中である。ただ今回新たに聞香が研究対象に加わり(香道＝組香には興味ないが)、また小笠原惣領家礼法研究所では現在、小笠原家の花伝書をもとに「小笠原流生花」を構築中といわれているため、今後は関心を茶以外の芸の世界に拡大していきたい。